



市民がつくるまちづくり情報誌 コミュニティくさつ

2009年

秋冬号



本と私の



Happy
ハッピーデイズ
Days

表紙写真 大條紘史

何の花かな？

秋に焼いたり茹でたりして食べました、またお正月にはきんとんにします。(答は裏表紙)



内容 コンテンツ

- ②③ 子どもが好き！本が好き！
草津おはなし研究会
- ④⑤ トロの贈りもの
山田小 読み聞かせボランティアグループ トロ
- ⑥⑦ 図書館の舞台裏
図書館司書 二井治美さん「司書のオシゴト」
- ⑧ 俳句散歩「冬」
- ⑨ 動植物から学んで素敵なヒトになろう
- ⑩⑪ ゆっくり草津街道物語⑨「山田港への道」
- ⑫ くさつ子どもフェスタ2010



子どもが好き！本が好き！

草津おはなし研究会

市立図書館（本館）と南草津図書館で月に一回ある「おはなし会」を知っていますか。そしてこの「おはなし会」が図書館を飛び出し、小学校や保育園にキャラバンで出掛けているって知っていますか。子どもにも親にも大人気の「おはなし会」を図書館と一緒に開いている「草津おはなし研究会」のお話です。

.....

草津おはなし研究会ってなに

草津市に図書館ができるもつと前、「草津おはなし研究会」の活動は始まりました。30年前と言うから若いお母さんなら、まだ生まれる前ですね。草津おはなし研究会ができたきっかけは県立図書館で開催された児童図書研究会。県内各地から多くの人の参加があり「この草津で本の読み聞かせ活動の種まきしよう」と約10人が子どもの本の勉強会として発足させたのが1980年4月のことです。

当時のメンバーは大半が子育て真最中。「自分の子どもだけでなくどの子にも本の楽しさを聞かせたい。子どもと本の架け橋になりたい。」という思いが、この30年の活動を支え続けてきました。

あります。絵本の読み聞かせ（開き読み）・紙芝居・人形劇・素話（おはなし）・巻き絵などの他に、ちよつとした手遊びも加え、子どもたちを惹きつけ飽きさせない工夫が随所に必要です。また、より多くの本に接する機会を与えられるよう子どもたちの年齢にあわせたテーマで、幾冊かの本を紹介する「ブックトーク」という方法もあります。

心をオニにして

発足当時から語りや絵本、紙芝居の読み方や演じ方について会員どうしで論じ合ってきました。また参考図書に関する個々の研究も長年続けてきました。こうした地道で真剣な活動を研究会の財産として積み重ねながら、その熱意や思いは新しい会員にも引き



と〜っても楽しいお話から、おはなし研究会の和気あいあいとした雰囲気が伝わります。右から代表の中村さん、吉田さん、福島さん、沙加戸さん、納村さん。

継がれていきます。

現在、会員は25人。おはなし会や講師の依頼は年間150回を超えます。毎週行う例会は実践を中心にスケジュールの確認、報告、演目の検討をしています。

例会では試演といって、次に行うおはなし会を想定し、これまでの練習の成果を披露しながら話し方や手元、立ち方などの批評をします。「少しでも



市立図書館（本館）で行われた「草津おはなし研究会 30周年記念おはなし会」には約50名もの参加者の前で表演。（10月29日）

良いものを表演したい」というみんなの真剣な思いから、遠慮して「他人に厳しいことを言わない」雰囲気はここにはありません。試演は喧嘩やいびりではなく、本番に向かっているディスカッションの場なのです。

おはなし研究会と学校

図書館で行うおはなし会には、図書のプロである司書さんも参加し互いに刺激しあいながら、より良

いおはなし会を目指しています。遠く長崎県からも図書館だけでなく研究会の活動も知りたいと研修に来られたこともあるとか。

さて学校と研究会の関係は一体どうなのでしょう。活動を始めた当初は学校からの依頼で、おはなし会をするために学校を訪れたときでさえ、うさんくさい目で見られることもしばしばでした。そんな空気も市に地域協働合校（きょうりょくがくこう）が取り入れられた平成10年ごろから大きく流れが変わったと感じています。

地域協働合校の理念である「子どもたちと大人がともに『学び合い、かかわり合い、よろこび合い』」の気運ができたのです。30年もの活動の歴史と実績は学校からの信頼に形をかえ、今では授業の一環としておはなし会の機会を持つまでの関係になりました。

子どもが好き！本が好き……。この真剣な思いから、おはなし会の前には担任の先生に「子どもと一緒に楽しんでください」とお願いしています。先生も一緒に笑ったり感動すると、子どもたちは安心しておはなしの世界に浸れるのです。

子どもの本がもつ力

一口に30年と言っても、一人ひとりの人生には色々なことが起こるもの。仕事や介護に追われる時期があったり、自らが病に倒れることだってあります。脳梗塞で倒れ失語症を患った会員を立ち直らせたのは研究会で続けてきた昔話の朗読でした。リハビリのために医師から勧められた新聞が読めず苦しんでいたのに、大好きな昔話の本は読めたのです。「今後の医療の参

者になった」と医師は感心しきりだったとか。

聞き手である子どもを元気にしたこともありました。ある低学年のクラスでお話を始めたところ、発熱で先生の膝の上で元氣なく聞いていた子どもが、お話が終わるころにはすっかり元氣を取り戻し、先生の顔を見て「面白かった」と笑顔で話す姿がありました。

子どもたちの絵本や児童書に出てくるお話には「向日性」と言って、最後には「くよくよしないで人生を前向きに生きていこう」といったお話が多いそうです。人を癒す力や良い意味で楽天的にしてくれる不思議な力を与えてくれます。「私たちが今でも元氣でにぎやかにやってこれたのも、こうしたお話にずっと触れていたからじゃないかなとも思っています。」

これからも続くおはなし研究会

お話する私たちの口元を一生懸命に見つけてくれる子どもたちに出会える喜びは、何ものにも代えることができません。「そんな子どもたちの期待に応えなければ」と自らの励ましにもなります。いつまでも生き活きと共に学び、歩む喜びを感じながら、仲間との信頼と安心感でこの先もずっと続けていたいと思っています。

草津おはなし研究会はこれからも子どもたちに素敵なお話を届け続けてくれるに違いありません。

（納村由美子）

トトロの贈りもの

山田小学校 読み聞かせ
ボランティアグループ トトロ



さてお次は
子どもたちの
身近な場所
である学校にも、
本の楽しさを
伝えてくれる
人がいるというお話。

市内の多くの小学校には、子どもたちに本の読み聞かせをする読書ボランティアグループがあることをご存知ですか。

子どもたちを本の世界へ誘う

ここ山田小学校でも、10年前から1年生の保護者有志による読み聞かせが行われていました。ところがメンバーが少なくなり5年前には自然消滅。「それなら自分たちでグループをつくらう！」と全学年の保護者にまで拡大し読み聞かせボランティアを募りました。読み聞かせボランティアグループ新生「トトロ」の誕生です。

現在のメンバーは20人。1学期に1回ずつ学年別にトトロによるお話会が開かれます。プロジェクターで投影したり、パネルシアター、巻き絵、ペープサートや大型紙芝居など様々な道具や手法を

とか。中には自分の子どもに事前に読んでもらい感想を聞くメンバーもいるそうです。素敵なことですね。

参観日でもないのに学校に行くなんて

活動を始めた当初は図書館から借りてきた本を読むだけでしたが、子どもたちに「より見やすく」「心に届くように」とペープサート・パネルシアターをつくるなど、みんなでワイワイ創意工夫しながら創作もしています。

モノの準備ができたなら配役を決めて練習。ピアノの得意なメンバーは効果音や伴奏を担当するなど音での演出も行うという熱の入れようです。

使って子どもたちを本の世界へと誘います。

山田小学校の特徴はこのお話会が朝自習の時間ではなく、授業の一環として位置づけられていることでしょうか。授業時間は45分、メンバーが交代しながら4〜5冊の本を届けます。

意外なことに誰でも知っていると思っていた童話や民話を知らない子どももいるのでスタンダードといわれる話や季節らしさを感じる話、人権をテーマにした話など、ときには先生とも相談しながら進める選書は、最も気を使いつつも楽しい作業

またそのころ「参観日でもないのに学校に行くことは、何だか先生の領域に踏み込むようで敷居が高いな」と感じていた壁も、学校側の「どんどん来てください」という言葉や先生方による前向きな準備協力が払しょくしてくれました。今では「トトロ」は学校の協力者でありパートナーだと感じています。

あつ、トトロのおばちゃん！

この活動がトトロの皆さんにもたらしてくれたものを聞いてみました。

活動をしていると毎週一回は学校に来るので、自然と学校の雰囲気や子どもたちの様子を感じるようになったとのこと。またスーパード「トトロのお



山田小 読み聞かせボランティア

左から久保さん、中村さん、馬場さん。
学年を超えてできる保護者同士の
つながりもトトロの
魅力の一つ。



「トトロ」
の活動のお
かけです。

「ばちゃん」とか、演じた配役の名前で声をかけられることもあるとか。こんな時には「子どもたちが楽しい時間を過ごしてくれたんだ」と、うれしくなる一コマです。

幼稚園や保育園でできた親同士のきずなも、小学校に入ったとたん「遠くなっちゃった」と感じるお母さんもいることでしょう。学校や子どもを取り巻く情報を交換したり、お下りの制服をまわすなど、学年を超えて親同士のつながりができたことも

たかが絵本、されど絵本…

また図書館の存在も身近になりました。本のプロである司書さんから子どもたちの前に立つときの服装や本の持ち方まで読み聞かせのアドバイスをもらえることも活動の魅力です。

たかが絵本、されど絵本…。この活動があればこそ出会えた素敵な本たちの中には、子どもたちだけでなく保護者にもぜひ読んでほしい本も少なくありません。子どもたちが素敵な本と出会えたときの輝く瞳を活動の糧に、これからもたくさんのお話を子どもたちに届けたいと思っています。

お話を聞いていると山田小学校の風通しの良い校風を感じます。学校は先生と子どもたちだけのものではなく、保護者も関わり、みんなでさわやかな風をつくっていると感じます。子どもたちがパラパラとめくる本は、もしかしたら「トトロ」が吹いている風かもしれませんね。

(荒川茂美)



幼稚園でもやっていた読み聞かせボランティア、小学校でもやりたかった。

草津点字グループ あゆみ会

視覚障害者の社会参画をめざして広報紙や図書などを点訳する活動を30年以上続けています。中途失明者の点字判読訓練のお手伝いや市内の小・中学校の総合学習での点字学習にも取り組み「情報と心のバリアフリー」をめざして活動しています。

草津音訳グループ さざなみ

中途失明した視覚障害者の中には点字を読むことが困難な人も多く依頼に応じて一般図書の録音テープを作成する活動をしています。また有志で障害者施設を訪問し対面朗読で読書の喜びを伝えたり障害者との交流を図っています。

もっと教えて！ 本との関わり方

今号のキーワードの一つは「本と人をつなぐ活動や仕事」。もちろんこの人は子どもだけではなくありません。ここでは視覚障害者の人たちと本や情報をつなぐステキな活動を紹介します。

図書館の舞台裏

草津市立図書館 司書

二井治美さん教えて 「司書のオシゴト」



図書館の中をよ～く観察してください。カウンターで本の貸出し・返却受付け・貸出しカードの作成をしている人、返却された本を所定の位置に返したり整理したりするのに書架の間を忙しく動き回っている人、ニコニコしながら子どもたちの話し相手をしている人、利用者から何やら言われている人、これみ～んな司書さんです。でも私たちが日ごろ目にするこんな光景は司書の仕事のほんの一部。この他に大変な仕事がたくさん隠れていることを知りました。

その本がもつ

「情報の価値」を見極める

まずは司書の最も大事な仕事と言われる「選書」。業者から毎日のように持ち込まれる大量の本の中から図書館としてどれを購入するかを決めるのですが、選書次第で図書館の特徴や傾向を変えることにも成りかねないので最も神経を使う作業となります。

時には出版社や卸業者から送られてくる一覧表を参考にすることもありますが、基本的には実物を手にとってパラパラとめくりながら丁寧に決めていきます。選書基準、利用者の声、新聞などの書評や関係団体の意、他の図書館の所蔵数、そして限られた予算…本のプロ「司書」の腕の見せ所です。もちろん利用者からのリクエストを優先しますが全てを購入できるものではありません。

選書ばかりしていると図書館はパンクしてしまいますね。当然、役目を終えた本から処分していく作業も必要です。ポイントはその本がもつ「情報の価値」。情報価値を早く終える雑誌は2年で破棄、新聞も近隣の図書館と役回りをきめ、市立図書館では京都新聞だけを永久保存です。

苦労するのは一般の本です。ボロボロになったからすぐ処分というわけにはいきません。万一その本を読みたい人がいたときに手にできるように、近くの図書館は勿論、県立や国立図書館にまで在庫の有無を確認しなければならぬ時もあります。単純に情報の価値と言っても、価値は人それぞれ違うから難しいんですね。



(上) 図書館のバックヤードの閉架。スイッチを押すと書架が移動します。

ニコリ笑って…それ、ダッシュ

私たちが手にとって本を選ぶことができる書架は「開架」と言われます。ここには話題の本やリクエストの多い本、司書さんが読んでもらいたい本など約10万冊が収納されています。図書館にはそれ以外に閉架と呼ばれる書庫があります。開架が図書館の表舞台とすると、ここは言わばバックヤード。開架に並ばない約20万冊の本を3か所に分けて収納されています。

開架に無い本をリクエストした時、カウンターで「しばらくお待ち下さい」と言われた次の瞬間、司書さんはこの閉架にダッシュです。階段を駆け上がり、書架から本を取り出し、また駆け下り、ニコリと「お待ちどうさまでした」と言う時の司書さんの心臓はバクバクしているとか。



(左下) こちらは上写真の階下。左と奥には本。右手前には新聞がドッサリつまれてあります。

図書館は私たちのまちにもやってきます、その移動図書館のわかくさ号です。この日は休館日だったこともあってわかくさ号もゆつくりとお休み。「求められる本の提供、児童サービスそして全域サービスを三大目標に、毎週2000冊の本を担いで図書館から遠い所を巡回しているんだ！」とわかくさ号は胸を張って言いました。「皆さんのリクエストや顔を思い浮かべながら2週間に一度、本を入れ替えをしているんですよ」と、わかくさ号を労わりながら二井さん。



わかくさ号です！

みんなの「まち」まで、本を届けてます。司書さんが毎回、みんなの好きな本に交換してくれてウレシイ。

人と本をつなぐ橋渡し

司書さんの仕事について少しわかってきたところで「司書さんって、いったい何をやる人たちなんですか？」と二井さんにズバリ質問です。「一言で言う市民と本との出会いの場である図書館を通して、人と本とを結びつける橋渡しをする。これが司書なんですよ」と優しく二井さん。「うん？判ったような気もするけど」。二井さんは続けます。「本の選書から購入、処分に至るまで本の管理は当然だけど、調査のお手伝い、他の図書館との連携、図書館の広報、イベントに関する企画や実行そして予算まで、要は図書館に関する全ての仕事です」。

なるほど、では苦労話は？「意外に手間の掛かるのが消すのに3時間もかかるようないたずら書きや汚されたり破り取られた本の補修なんです。注意書きをベタベタ貼るのは、本を大事に扱って頂いている大多数の皆さんに大変失礼ですし」と大変お困りの様子。また私たち一人ひとりの関心や趣味も違うことから、それらに関する様々な本の問合せに応じるのも大切な仕事です。二井さんは言います。「だから司書は自分の専門分野に関する知識以外に、地域性を持った情報や世の中の関心事など浅くても良いから広く情報をもっておくこと。常にアンテナを張っておくことが必要なんです。こんな図書館の仕事で20名の職員で頑張っているんですよ。」と二井さんは厳しい表情でおっしゃいました。

で、最後に二井さんに一言だけいただきました。「司書さんって、やっぱり家で本をいっぱい読んでいるんですか？」「私も司書として『紺屋の白袴』にならないうちに毎月5、10冊の本は読んでいます(笑)」(辻浦岩水)

図書館こぼれ話

二井さんはお忙しい中、たくさんのお話をしてくれました。とても楽しかったので紙面のゆるす限り「こぼれ話」をご紹介します。字が小さくてゴメンなさい。

オミマイ！ オーミマイ！

他県の図書館司書が来たときのこと。「オミマイについて書かれている本ありますか」と尋ねる子どもに「お見舞い？どんなことが知りたいの」と二井さん。よ〜く聞いたら「近江米」だったんですよ。ついではその図書館司書は「なんだお米のこと。てっきり近江舞って踊りかと思っちゃった」ってオチまでつきました。

本の棚卸ダイエット

年に一度の仕事ではありますが、機械化されているとはいえ、30万冊もの本の点検（棚卸し）は大変で力も気も使います。この作業で体重が4kg痩せたことだってありました。…判ります。（でも点検後は元に戻ったようです。）

司書の仕事って

健康診断の問診表で仕事の内容を書込む欄があって「デスクワーク」「立ち仕事」「力仕事」「接客業」…司書ってすべてに当てはまって、どれにしようかと迷いました。

赤ちゃんだって

赤ちゃんにも貸し出しカードを作ってもらいます。小さい子が多くの本の中から自分の好きな本を自分のカードで借りにくる時の嬉しそうな顔。忘れられません。本って小さい子から高齢者まで全市民に関わりが。こんな幅広い層に利用してもらえる図書館に誇りをもってます。

俳句散歩「冬」

地球の温暖化が進んで、冬は昔ほど寒くなくなり、また暖房設備も昔に比べてよくなり、冬の住環境は格段に快適です。でも、冬のお外はやはり寒いですね。

今回は、ご存知小林一茶の冬の俳句を読んでみましょう。

(解説 橋詰辰夫)

むら時雨しぐれ

山から小僧が

ないて来ぬ

一茶



おおさむ こさむ 山から 小僧が 泣いてきた
なあんといつて 泣いてきた なあんといつて 泣いてきた
寒いといつて 泣いてきた

こんな童歌をご存知でしょうか？ この句は、この歌を引いて一茶独特のユーモアと遊び心で詠んだものでしょう。冷たい時雨がざっと降って来たな、これは時雨小僧が泣きながら山から下りてきたのだなと言った意味です。

草津でもこれから木枯らしが吹き、さつと一時激しく降る叢時雨むらしぐれがくる日も増えて来ます。小生が子どものころ、風が吹き時雨れてくるとお袋さんは「山から小僧がまた来たな！おおさむこさむ」とよくつぶやいていました。一茶は1763年生まれですから、200年以上も前からこの童歌があったんですね。当時の庶民は四季の移ろいをそのまま受け入れ、自然を恐れながらも、またそれを楽しんでいたのではないのでしょうか。

今のように暖房の効いた室内でゲームに興じる子どもと違って、当時の子どもたちは外に出て寒ければ「押しくら饅頭押されて泣くな！」と押しくら饅頭を楽しみ、雪が降れば雪合戦をしたり、雪だるまを作ったりして楽しんでいました。冷たい時雨さえ、皆で「寒いといつてないできた」とはやし立てて寒さを凌いでいたのです。

注：叢時雨（又は村時雨）

ひとしきり激しく降ってはやみ、やんでは降る雨

人のため

しぐれておはす 仏哉

一茶

折からの時雨に背を丸めて急ぎ足で歩いていて、ふと見ると路傍の石仏が濡れていた。「これは人々が濡れて困らないように仏さんが身代わりになって濡れていてくれるんだなあ」と一茶は感激したんですね。

お地藏さんの耳や目をさするとその部位の病をお地藏さんが身代わりになってくれるという信仰は各地にあります。この仏さんは病ではなく代わりに濡れていてくれると言っているのですが、一茶は御仏が人間のあらゆる病や災いを背負っていてくれるのだな、我はしっかり生きなければと言いたかったのでしょう。

今では生活に便利なものが大変多くなりました。ケータイやネットでいろいろなことを処理してくれるが、人のためにしぐれてくれる存在ではなく、却って災いを人に与える存在になっているように小生には思えます。

私たちも周りの人々に心配りし、人のためにしぐれるような存在になりたいものです。



動植物から学んで 素敵なヒトになろう！

ツワブキの花が終わりかけると、ユズやカリンの実が急に黄色くなった。秋の庭は明るい。

強風が吹き荒れた台風18号は当地にさほど大きい被害をもたらさなくてよかったが、庭では驚異的な背丈の皇帝ダリア（メキシコ原産）が4本、先端から40cmほどが折れてしまった。晩秋に咲くこの花は、これから花芽ができる時期だっただけに残念至極。それでも強風に耐えたものは5m近くなり、折れたものも脇芽が一気に伸び、今年も紫ピンクの大きい花が咲き始めた。昨年より5日遅い開花であった。



ムクロジ
(無患子)

強風のあとは木々の実を拾い集める楽しみがある。「物は考えよう」だが、物の少ない時代に育ったせい、「転んでも只では起きぬ」性格由縁か。

草津市指定の自然環境保全地区にある印岐志呂神社（片岡町）のオガタマ（小賀玉木）や保護樹木に指定されている正光寺（西矢倉）のムクロジ（無患子）の実（絵）も随分たくさん落ちていた。実を手にとって見る機会が少ない高木だが、オガタマの集合果は巫女さんが持つ鈴の原型と言われ、ムクロジの真っ黒い種子は羽子板遊びの羽根づくりに用いる玉である。

この季節、山歩きをしていると食べられそうにない小さな柿が鈴なりになった木に出会うことがある。時には足元の真っ赤な落ち葉で柿の木の存在を知る。この柿10個あればお鏡餅につきものの串柿ができる。皮を剥いたあと細長い割り竹の中ほどに6個をくっつけて刺し、その両端に少し間を空けて2個ずつ刺す。両端に2つずつ、中に6つで「夫婦仲睦まじく」とは洒落ている。水平にして日に干し、柔らかくなったところに押して平たくするだけで良い。ウラジロも里山にいっぱいあり、八の字型は末広がりであり子孫繁栄を願う。

第16回

深まる秋

文・絵 矢原功

身近な自然を利用し、楽しんできた先人の知恵を思い出して楽しみたいものです。

「おせち料理」の声を聞きだしたが、クワイもその一つ。ところで、近年、田んぼの脇などに増えてきた嫌われ者に「オモダカ」という植物がある。クワイの原種とかで、細長い三角形の葉と白い可憐な花が特徴（絵）。根の先には何とも可愛いチビツクワイができる。枯れてしまうと分からなくなるので姿があるうちに根ごと掘り上げて水につけておくと小さい球茎ができてくる過程も楽しめる。こんなのをおせち料理に加えるのも野趣があり、「こまめに働ける」って意味でいいかもね。

前述の皇帝ダリアは幹を節ごとに切って分身を増やすことができるので、今春、多くの方にもらっていた。おかげで今年は共通のニュースが飛び交い、今は近所でも花談義が広がって実に楽しい。庭のアケビも久々に受粉してやったので、この秋にはたくさん実り多くの方に昔を懐かしんでもらった。分かち合う楽しさ、共通の話題や感動の広がり乾杯！

11月は草津市の生涯学習推進月間。「学び」に貪欲であれ！と呼びかけたいものですね。

身近な自然は心癒されるばかりでなく、「知る喜び・感動する心」は脳を活性化し、ストレス発散にも万葉に勝るものです。

過ぎ行く秋を大いに楽しみ、広げていただきたいと思えます。



オモダカ

写真・大條紘史
絵・大村恵

第9回 山田港への道

ゆっくり草津 街道物語

滋賀の港町という、どこを思い浮かべるでしょう？現在のように交通が発達していない時代は、母なる湖の波に揺れながら人や物資を乗せた船が行き来していました。

草津の港は中世に栄えた志那、江戸時代には近江八景のひとつに描かれた矢橋、明治から昭和の時代に繁栄した山田の3つの港があります。

建物の床にまでお堀の印

木川薬師堂は鎌倉時代につくられた国の重要文化財である薬師如来をまつており、以前は両脇に2体の毘沙門天がいましたが、現在は栗東市立歴史民俗博物館に保管されています。今も薬師の日である1月8日と8月8日には、栗東市金勝山の金勝寺からお勤めに来られます。

さて市立武道館に着きました。ここは武道館の建設に伴い行った平成12年の発掘調査から、この場所に二重の堀を持つ山田城があったことがわかりました。目を凝らすと武道館の玄関前に点々と丸い印が残されていて、その軌跡はなんと館内にまで続いています。この印の跡をたどると直線ではなく弧を描く円形の堀だったことがよくわかります。

この地を支配した山田氏は室町時代に活躍した佐々木六角の家臣で、琵琶湖からつながる山田港を治めるため、ここに城を構えたといわれています。

青ばなと赤いポストと

木川は「あおばな発祥の地」といわれ、山田市民センター前にはあおばなにちなんだ万葉歌碑が建てられて

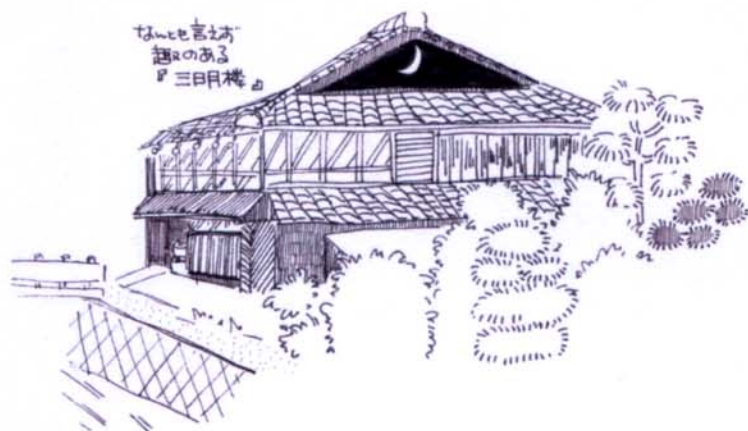
います。浮世絵や東海道名所図会にも「あおばな摘み」の絵が描かれ、友禅染の下絵としてあおばなが用いられていたのはご承知のとおりです。

山田市民センターに来たらもう一つ知ってもらいたいことが。この場所は、昭和9年に室戸台風で倒壊した山田小学校がありました。この時、校庭の樺の木に子どもたちを結びつけ強烈な暴風雨から命を助けたという「命の木」や、校舍倒壊の犠牲となった17名の生徒と一人の先生の名が刻まれた石碑がここにあり、自然の脅威と命の尊さを今に伝えてくれます。

市民センターから県道山田草津線に出る角には、昔懐かしい赤くて丸いポストが現役で頑張っていて、その家の奥に「山田郵便局」の看板も見ることができました。以前は郵便局だったのでしょうか。なつかしいほのぼのとした存在のポストです。

この山田道から琵琶湖に向かいます。渡海神社を少し過ぎたところ、川に面してなんと風情のあるたたずまいの酒屋を見つけることができます。1階は出格子、2階

は欄干のある廊下の家屋の妻壁にはくつきりと三日月が刻まれています。こちらの酒屋さんが石山寺近くにあった料亭「三日月楼」を買い取り、ここに移築されました。往時の2階の欄干から見た琵琶湖の眺めはさぞ美しかったことでしょう。少し歩を進めると膳所城の門を移築したとされるりっぱな門に出会いました。本多家の家紋である立葵の軒瓦が歴史の証言者です。





水位が下がって、河口近くに移動したときの山田港（跡）。

港に船があがれない？ 山田港

旧山田港跡までは車で移動しました。山田の杉江善右衛門は、明治5年に山田と大津の航路を開きました。当時の船着き場は想像しがたく、近くに建つ記念碑とその時分、切符売場や休憩所だった建物と蒸気汽船の写真からその面影をたどるばかりです。

昭和15年ごろから琵琶湖の水位が低下しはじめ、船がここまで上がれなくなりました。その後、山田港は河口近くに移動することになりました。昭和43年まで使われていた棧橋跡とヨシの間を泳ぐカルガモの景色が私たちにのどかな時間を与えてくれました。

現在の北山田漁港に來ました。航海の神である金刀比羅宮がまつられ、たくさんの漁船が並んでいます。大きな建物の

中で漁を終え網を直す人の光景も見られ海とはまたちがう琵琶湖のにおいを感じることでもできました。漁業組合には鮒ずしを漬けた樽がいくつもありましたが、近年は外来魚に困っているという話で、琵琶湖の郷土料理である鮒ずしやホンモロコが食べられなくなっていくのはやりさびしいですね。

日本最初の考古学者 木内石亭

ここから少し歩くと北山田バスターミナルに着きます。白い花をつけた大きなギンモクセイの甘い香りに包まれ、天気の良い日も手伝って心も足も弾みます。

木内石亭が暮らしていたといわれる所には隣り合わせにまつられた金刀比羅宮と貴船宮、それと常夜灯が当時は湖がここまで迫っていたことをうかがわせます。草津の偉人の一人、木内石亭は江戸中期に生き、こよなく石を愛した人物です。様々な石を収集し、東海道名所図会にも石亭が記した石の絵が登場するなど、その時代の全国な有名人もありました。残念なことに石亭の集めた石の行方は散々になりましたが、生野鉱物館や栗東市立歴史博物館、山田小学校などで標本や集めた石の一部を垣間見ることができます。

木内石亭邸跡から路地を少し入ると長安寺に行くことができます。

浄土真宗のこのお寺は信長と石山本願寺が戦ったおり、湖南門徒の拠点となつて石山本願寺への物資輸送を援助したことで有名です。

境内には古い本堂の鬼瓦が残され、先代住職が使用した御籠は草津宿街道交流館に展示されています。

北山田会館前には江戸時代末期の道標があり「これより山田ノすく舟のり場」と刻まれています。今でいう案内板ですね。すぐ隣には仁徳天皇をまつた若宮神社。もともと浜のほうにあった神社ですが江戸時代なかばにこの地に移されました。門は明治36年に大津本陣の正門を移築されたもので瓦には江戸時代の年号が刻まれています。



ゆっくりと時の流れを感じて

若宮さんの隣には薬師院。市の文化財にも指定されている薬師さんは、信長の元重の戦いで焼けた跡があるといわれています。ガラス戸越しにのぞくと座っているせいか、丸みがあつて、とてもかわいい感じの石仏さまで。こちらは禅宗のひとつである黄檗宗のお寺なので門には「不許葷酒入門内（くんしゅもんないにいるをゆるさず）」の戒壇石、にらやお酒など臭いものを食べた人はこの中に入れないという意味です。この「ゆっくり草津街道物語」で野路を歩いたときに、常徳寺で同じ戒壇石を見ました。

秋のうららかな陽射しを感じながら歩いた山田港跡はこの草津に人や物資を運び、街道と宿の繁栄を支えた歴史の宝庫です。船や荷馬車が往來した時代の時間の流れと比べると、現代は利便性と機能性には恵まれましたが、ついつい目先のことに追われがちです。目の前に大きく広がる琵琶湖と比良山系を眺めながら山田を歩くと、日ごろ出会えないものを見かけたり、ほっこりするような人に出会えたりします。ゆっくりと時の流れを感じてみる山田の散策に出かけてみませんか。

（荒川茂美）

さあ、2010年。元気にスタート!

くさっ子どもフェスタ 2010

1月17日(日) 10:00~13:30 (受付9:30)

野村運動公園グラウンド・市民体育館

主催 くさっ子どもフェスタ2010 実行委員会

後援 草津市/草津市教育委員会

問合せ(財)草津市コミュニティ事業団

TEL 565-0477 / FAX 562-9340



絵と字/中村明雄

編集後記

▼冬米、冬温、冬索、冬日、冬心、冬蟄、冬天、冬風、冬嶺。さて、あなたのお好みは。(大條) ▼ドンぐリの渋を抜き、すり鉢ですってドンぐリパンを試作試食しました。渋みは少しあるが香りに野趣があり美味でした。来年再挑戦します。

(橋詰) ▼休館日の市立図書館、その「バックヤード」を案内して頂き、司書のみなさんのお仕事、ご苦労を知りました。(中井) ▼紅葉便りの中、生垣のサザンカが咲き始め、秋の深まりを感じます。急な寒さで体調を崩しやすい季節です。ご自愛のほどを。(矢原) ▼久しぶりの取材、楽しかったです。このワクワクドキドキをいろんな人に分けてあげたい!(大村) ▼心がカサカサした時は本屋さんで絵本を立ち読みしたりします。ニンマリ笑顔とともにスキップまでしたくなる!(荒川) ▼この前、いつも持ち歩いている愛用の3色ボールペンを落としてしまいました。手になじんでただけに何だか落ち着かない。落し物にご注意を!

(茶木)

さあ、2010年。いつものように子どもフェスタで元気にスタート! 今年は熱気球搭乗体験が初登場! もちろん、もちつき・ステージ・スポーツ手づくり・未就学児コーナーなど人気コーナーもさらにパワーアップ!



「何の花かな?」

こたえ



クリの雌花です。雄花はブラッシのように連なって咲き、人目につきますが、雌花は数mmの大きさで目立たない花です。雌花に花粉がつくと、ご存知のいぐりが成長して美味しい栗の実になります。来年、栗林にルーベを持って出かけ、雌花を見つけて下さい。

市民編集ボランティア募集!

コミュニティくさっ編集部

(財)草津市コミュニティ事業団内

〒525-0037

滋賀県草津市西大路町9-6 (まちづくりセンター内)

電話 (077) 565-0477

ファックス (077) 562-9340

メール com-com@mx.biwa.ne.jp

URL http://www.kusatsu.or.jp/

community



再生紙使用

~地球にやさしいまちづくり~